

発音に関する諸種の知識

(一幕二場)

無断上演を禁ぜず

関口存男

第一場 教室

【大先生】 エー、今日は少し発音の話をしてしましましょう。発音は勿論ドイツ語を習う抑々[そもそも]の最初にやるべき事ですが、ドイツ語の発音が割合にやさしいのとそれにもう一つは、格とか変化とか云った様な厄介なものが応接間の入口にうんと控えているから、発音の玄関であんまりゆっくりして居ると云う訳には行かなかったので、第一学期の最初では、極くざっと予備知識を授けたにすぎません。今日はつまりそれを固め、同時に発音に関する一般的法則を特に意識して見ようと云うわけです。

1. *Silbentrennung* (綴の切り方)---- 諸君はもう大分色々な事を習ってしまった後ですから、少し根本的なところから話を起こしても凹[へこ]たれないでしょう。これから話そうとする「綴の切り方」と云う奴は、発音問題の根本に横たわっている「綴」(*Silbe*)というものに対して注意を喚起せんがための手段でもあり、同時にまた、実際にその必要が起って来るから一寸述べて置くのです。たとえば手紙を書く際なぞに、行の終に来て、どうしても一字が書き畢[お]えられぬ場合があります。その時に、その一字を随意的所で中断して次の行へ移って宜しいかと云うに、決してそうではありません。その時には「綴」というものを尊重しなければならない。一つの綴が上と下とに分かれてしまつては困ります。たとえば *Deutsch* という字を *De-utsch* なぞと切つてしまつてはいけません。 *Deutsch* は一字であると同時に一綴なんですから、これはもうどうしても二つに切るわけには行かないのです。

ところが若し、*Deutsche* (ドイツ人の女)だとすると、これは「ドイ」「チェ」と二綴になりますから、書き切れなかつたら *Deut-sche* と切つて構いません。

すると *Deuts-che* はいけないか? *Deu-tsche* ではどうだ? と云う疑問が当然起って来なくてはなりません。---- それらはみんな不可ないので、*Deutsche* は必ず *Deut-sche* と切ります。綴の切り方は、これだから矢張り一通り研究しておかなくてはならないのです。

2. *Inlaut* (中間子音)について----今述べた *Deutsch* ですが、単に一綴で *Deutsch* という時には、*tsch* は *Auslaut* (尾音)と云います。(D-の方は *Anlaut* [頭音]です。)ところが、*Deutsche* または *Deutscher* 等と二綴字になると、*tsch* は二つの母音の間に挿まっているから、これを *Inlaut* [中間音]と呼びます。これは、たとえば *s* は *Anlaut* か *Inlaut* の時には濁音となり、*Auslaut* の時には清音になると云った様な区別をする時に必要な概念です。一寸断わって置きますが、今話しているのは「一概念」を含む「一字」についてなんで、たとえば *Hausarzt* とか *erachten* とか云つたような「複合詞」

はまた別です。第一 Hausarzt は Haus-arzt [はオス・アールツト]で、[はオザールツト] とつづけては読みません。erachten も er-achten [エル・あハテン]であって[エらハテン]ではありません。それ故、Hausarzt の s も、erachten の r も、全体として見れば中間にあるようでも、実は Haus または er- の Auslaut なんです。

中間音という概念を説明したのは、これが綴を切る時に殊に厄介だからで、これからは、なる可く独逸人そのものの発音心理の中へ這入って考えて行きましょう。そうでなしに、これは斯う云うものと思え！と云っただけでは、やはり満足が行かないでしょうから。

3. 分綴する Inlaut と分綴せぬ Inlaut----sch, tsch, ch, pf, tz, dt, ph, th, zz, ck, ss, tt, ll 等は、字は二字三字四字に書きますが、発音そのものは、決して前のと後のとを順に発音するのではなく、分けがたい一つの発音です。それに反して x は一字でありながら、実は二つの子音です。また chs [クス、x と同じ] st, sp, rl, tr, schw, schm, schn, mt, rt 等は、字も二つ以上、発音も二つ以上です。

(1) ところが分綴の際には、そうした事にかかわらず、概ね次のような分類を行うことができます。

分綴せぬ中間音	分綴する中間音
sch*	tsch* = t-sch
ch*	pf* = p-f
ph	tz* = t-z
th	sp = s-p
dt*	st = s-t
x	chs = ch-s
ß	ck* = k-k

殊に* の印をつけたものは、はっきりと覚えて下さい。ck を分けるときに c-k としないで k-k とするのなぞは特に重要です。

Fi-scher	漁夫	Dol-met-scher	通訳
Bü-cher	書物	Gip-fel	頂上
Pro-phet	予言者	Kat-ze	猫
Goe-the	ゲーテ	Knos-pe	蕾
Stä-dte	都会 (pl.)	Mas-ke	マスク
Ma-xi-mum	最高限度	Ach-se	軸
Stra-ße	街	druk-ken	印刷する

(2) 中間音がもし一字であり一音である時には勿論分けられませんから、Fischer, Bücher 等の例にならって、その子音は後の綴の方へつけます。

Blu-me	草花	Ro-se	薔薇の花
--------	----	-------	------

(3) 子音が二つ以上あって中間音をなしている場合は、すべて Mak-ke, Knos-pe 等にならって、「後に来る母音と直接に結びついて一音をなす子音」のみを後へ残して、それ以外はすべて前の綴につけます。

Damp-fer	汽船	Seuf-zer	溜息
at-men	吐息をつく	Kir-sche	桜ん坊
Män-ner	男たち	seufz-test	汝は溜息をした
Tan-te	叔母	Kar-te	カルタ

但し st は後の方へつきます。

Ham-ster	やまねずみ	Fen-ster	窓
Herb-stes	秋(の)	gar-stig	厭な

此の点で、たとえば英語の切り方とは主義がちがっています。英語は、語尾その他の文法を尊重して、語源的(etymologisch)に切ります。たとえば end-ed (終わった) 等。ドイツ語は en-de-te と切ります。勿論「終る」という動詞の語幹は end- (英 end-) で、その後につくのは語尾ですから、意味を考えれば英語の方が合理的かも知れませんが、実際の発音を考えたらドイツ語の切りの方が合理的です。

但し、前にも一度云った様に、複合詞の際は別です。endete なぞは、たとえ文法的には分解できても、複合詞だとは謂いません。それに反して、betrachten 等は立派な複合詞です。(4) 中間音がサイレントの h である時も、(2) に従います。サイレントの h は、気取って発音する際などには、発音することがある位ですから、取り扱い方はやはり普通の子音と同じになるのです。

ru-hen	休む	se-hen	見る
Rei-he	列	Mü-he	努力

4. 複合詞 Composita----複合詞は、今まで述べて来たものとは違って、意味の構造を尊重して、即ち語源的につづりを切ります。また大抵の場合には、発音の方法そのものが既に語源を尊重してなされますから、結局はつまり同じことになるわけです。たとえば Abort (変種) という字があります。これは Ab- という前綴 (派生を意味す) と、「種類」という Art とから出来ています。それ故、Abend [あーべント] のようには読まないで、Ab-art [あっぷ・アールト] と読み且つ分綴します。Abend は A-bend です。

Ab-ort, m. 便所 [あっぷ・オルト] (アボルトに非ず)

Stand-ort, m. 所在地 [シュタント・オルト] (シュタンドルトに非ず)

Mittag-essen, n. 昼食 [みッターク・えっセン]

又は [みッターハ・えっセン] (みッターゲッセンに非ず)

Dreh-orgel, f. 手廻しオルガン [ドレー・オルゲル]

(ドレーホルゲルに非ず)

be-urteilen 判断する [べうルタイレン] (ボイルタイレンに非ず)

weg-eilen 急ぎ去る [ゑゝ ック・アイレン]

又は [ゑゝ ヒ・アイレン] (ゑゝ ガイレンに非ず)

Puls-ader, f. 動脈 [ぷルス・アーデル] (ぷルザーデルに非ず)

Schau-spiel, n. 芝居 [シヤオ・シュピール] (シヤオシュピールに非ず)

5. ドイツ語の母音は一種の破裂音(Verschlußlaut) なり ---- t, k, p の三音に

は或種の共通性がある、三つとも破裂音、もしくは爆発音です。d, g, b も略同様です。ところが、ドイツ語では、a, o, u 等の母音まで一種の破裂音なのです。たとえば---

an einem Ort. (ある場所に)

これを、たとえば仏蘭西人や英国人に発音させて見ると、----日本人でもよろしい----「アンナイネモルト」とやります。ドイツ語の発音はそれではいけない。「あん・あインム・オルト」と、a-, ei-, o-の所を一つ一つぷつぷつと切って破裂させなければ不可ません。

英人は、たとえば **there is, there are** 等の二字を、つないで発音します。「ゼアリス」「ゼアラー」などと。ドイツ語ではそれはやりません。es ist は「エス・イスト」であって「エシスト」ではありません。何故そうならないかと云うと、それは第一母音がすべて破裂音だからです。というよりはむしろ、ドイツ語の a や o は、その前に何か破裂を意味する子音をつけなければならない所なのです。

だから、たとえば「便所」と云う **Abort** は、極くルーズに発音すれば「あッポルト」に近寄って聞こえますが、ほんとうは「あッポルト」ではなくて、やはり「あッポ・オルト」です。少くとも独逸人の発音意識は、「あッポルト」なぞと言っているつもりではなく、「あッポ・オルト」と云っているつもりなのです。

発音意識と、「聞こえ方」との間に一寸した差が生ずると云う事は、何処の国語にでもある現象です。たとえば日本語にもそんな事が沢山あります。「沢山あります」の「あります」は、我々の発音意識では **arimasu** のつもりですが、大抵の人の「あります」は **arimas** と聞こえます。西洋語の s と同じように su を発音していながら、別に u を一字省いたつもりではないのです。**Abort** が時とすると「アッポルト」に聞こえるのも、つまりはそう云う現象なので、そんなのを正式だと思っではいけません。

6. 例外----但し、**Keine Regel ohne Ausnahme** (例外なき規則はなし) と云う諺がある通り、多少の例外はあります。けれども、反対に考えると、規則があってこそその例外なんで、例外があると云う事こそ規則の存する証拠です。**Keine Regel ohne Ausnahme** という諺も、読み様によっては「例外なくしては規則なし」とも読めます。変な諺ですね。

たとえば **hinein, herein** 等は、**hin, her** の後に **ein** が附いたのだから、「ヒン・アイン」「ヘル・アイン」と読みそうだが、これは例外で、**hin-, her-** と前置詞の結合は必ず一字として、つづけて読みます。

herauf [へらオフ] hinan [ヒなん]

herüber [へりゆーベル] hinab [ヒなっプ]

その他、たとえば **beobachten** (観察する) なぞは、分解すれば **Be-ob-ach-tten** ですが、習慣として、「べおーバハテン」と読み、「べおープアハテン」とは読みません。

7. **Bindestrich** 繫符 [-] ----複合詞を二部分に分けたり、たとえ複合詞でなくても、たとえば **On-kel** (伯父) 等、単なる一字を二綴に分けたりする時

には Trennungszeichen (離符)または Bindestrich (繋符)と名づけられる - の符を用います。

此の記号は、必ずしも一行の終で書き切れなかった時に用いるばかりではなく、その他にも用法があります。

(1) 一字に続けて書くにしては、余りに関係が薄弱だと思われるような複合詞を造る時に用います。たとえば----

New-Yorker Bankenviertel	紐育の銀行街
Fünf-Tage-Woche	五日一週制度
Kommunisten-Krawall	共産党騒乱
Ueno-Park	上野公園
Europa-Politik Italiens	伊太利の欧州政策

では何を一字で書いて何を繋符でつなぐか、と云う事は余程の判断を要する問題で、五日一週制度なども、もし実現されるか、それとも世人がやかましく云い出して相当名高くなったら、恐らくは **Fünftagewoche** と書くようになるでしょう。

(2) 二字以上の字の共通部分を省略する時にも用います。たとえば **Kriegsschiff** (軍艦)と **Handelsschiff** (商船)とを一緒に書くと、

Kriegs- und Handelsschiff.

または、もっと文章の中へ入り込んで、「戦前の時代にも、また戦後の時代にも」と云おうとすれば、

Sowohl in Vor- als auch in Nachkriegszeit.

などと云えるわけです。

8. 規定詞について----今述べた **Kriegsschiff** と **Handelsschiff** とを並べて考えると、その共通の部分、即ち **Schiff, n.** (船)という字が、その両方の字の基礎になっています。**Kriegsschiff** は「船」の一種であって、**Krieg** (戦争)の一種ではない。

それと反対に **Belagerungskrieg** (要塞戦)と **Stellungskrieg** (陣地戦)とを比べて見ると、こんどは **Krieg** という字が両方の土台になっています。

Filmpropaganda と云えば、それはフィルムを以てするプロパガンダで、**Propagandafilm** と云えば、それはプロパガンダ用のフィルムです。

要するに、ドイツ語は、英語や日本語と同じ様に、基礎詞の方を後に置いて、それを限定する規定詞の方を前につけます。

「あたりまえじゃないか」? ----いや、あたりまえじゃありません。それと正反対の場合もあります。たとえば「村田式」と云おうとすれば、**System Murata** となります。**Murata-System** とも云いますが、**System Murata** と云った方が謙遜でもあり気が利いてもいます。同様に「村田の場合」は **Der Fall Murata** です。**Murata-Fall** とはあまり言いません。同様に「第二号室」は **Das Zimmer Nummer zwei** です。**Zwei-Nummer-Zimmer** とは決して云いません。

これらは先ず特殊な例ですが、極く普通な場合では、たとえば二格の際を考えてごらん下さい。「失業者の洪水」は **Die Flut der Arbeitslosen** です。

Arbeitlosenflut は少し変です。必ずしも日本語通りの順にはなりません。日本語は、一種ゆとりの取れない、抜き差しのならない論理的な語順を持っていて、規定詞は必ず前に来るのですが、外国語はそうではありません。

けれども、まあ、ニ格等の場合を除けて、一字に書く場合だけについて考えると、規定詞は必ず前に来ます。そして、複合詞の性は、基礎となる、即ち最後に来る詞の性に従います。

9. **Betonung** (アクセント) は規定詞の方にあり----規定詞と云う事がわかると、同時にアクセントの問題もわかります。即ち、複合詞に於ては、アクセントは規定詞の方にあるのです。**Ab-ort** は「あッブ・オルト」であって「アッブ・おルト」ではありません。

Ausland	[あオスラント]	外国
Mitschuld	[みットシュルト]	共犯
Anfang	[あンファング]	初
Übermensch	[ゆーベルメンシュ]	超人
Vogelnest	[フオーゲルネスト]	鳥の巢
Wörterbuch	[ゑ ^ゝ ルテルブーフ]	字引
Rundfunk	[るントフンク]	ラジオ
Flugzeug	[フルークツォイヒ]	飛行機

但し、非分離の前綴に限って、アクセントを置きません。これは既に諸君の知っている範囲です。

Verstand	[フェルシュタント]	悟性
Vernunft	[フェルぬンフト]	理性
verstehen	[フェルシュてーエン]	理解する
erkennen	[エルケンネン]	認識する
Erkenntnis	[エルケントニス]	認識
betrachten	[ベトラハテン]	観察する
Betrachtung	[ベトラハトゥング]	観察
Entwurf	[エントウルフ]	計画

分離したりしなかったりする前綴 **hinter-**, **über-** 等については、そのアクセントの在場所と共に既に一度述べた事がありますから、茲では省略します。(第二巻文法 156 頁下の表)

之を要するに、複合詞にあつては、基礎となる単語よりも規定詞となる単語の方を強く発音すべきである。ただ一つの例外は、**er-**, **be-**, **ver-**, **ent-**, **zer-** 其他の非分離前綴で、こいつは、意味の力が弱いから、規定詞としては取扱わず、基礎詞の一部として扱う----斯う云う事になって来ます。

10. **Einklang** [あインクラング] と **ein Klang** [アイン・クラング] ----だから、発音を間違えると、時には飛んでもない事になって来ます。ドイツ人に向って「アイン・クラング」と、「ら」に力を入れて発音すれば、**ein Klang** (一つの響き) だと思ふでしょうし、「あインクラング」と、「あ」に力を入れて発音すれば、**Einklang** (調和) だと思ふでしょう。

同様に、**erblich** という字がありますが、若しこれを「エルプリヒ」と「り」に力を入れて発音すれば、**erbleichen** [蒼ざめる] の過去 **erblich** だと思われるでしょう。ところが、その外に「世襲の」「親ゆずりの」と云う別字があります。併し其の時には、**erb-** が **Erbe** (遺産) の省略形で、**-lich** は形容詞の語尾ですから、「えルプリヒ」と「え」が強く発音しなければなりません。また **b** は、**Auslaut** [尾音] になりますから、**p** の発音になります。

11. **Unglückszeichen** [凶兆] [**Un-glücks**]-[**zei-chen**] "◡◡'—◡----**Unglück** [うんぐリュック] (不幸) は、それ自身が既に複合詞で、**Un-** (不)と **Glück** (幸) との二部分からなっています。**Zeichen** [ツァイヒェン] は、複合詞ではないが、**-en** という語尾があるから、**Zei-** の方にアクセントがあります。此の二つが寄って「凶兆」という **Unglücks-zeichen** を構成すると、さあアクセントが大変です。主なるアクセントは **Un-** にあって、副のアクセントが **zei-** にあるという事になって来ます。

辞書などでは、それがどう示してあるかと云うに、大抵の辞書では — や ◡ 等の印で各綴を現わします。— は長母音のある綴を意味し、◡ は短母音のある綴を意味します。たとえば、日本語を例に取って、これをドイツ語式に現わして見ると、

加藤三郎 (Ka-tō-sa-bu-rō) [◡—◡◡—]

大山行雄 (Ō-ya-ma-yu-ki-ō) [—◡◡◡◡◡]

太田幸蔵 (Ō-ta-kō-zō) [—◡—]

Un-glücks-zei-chen をこれで現わすと [◡◡—◡] となります。扱てこれにアクセントの印を入れるのですが、まず基礎詞の中のアクセント、即ち **Zeichen** の **Zei** には ' を用い、規定詞のアクセントには " を用いるのが普通です。即ち "◡◡'—◡ となります。時には "' や "" が必要になることがあります。たとえば **Lebensanschauung** (人生観) といえ、まず基礎に **schauen** という動詞があります。それは '—◡ で現わせます。意味は「見る」です。それから **anschauen** ["◡'—◡] (観ずる) という複合詞が出来ます。「観」という名詞は **Anschauung**, f. ["◡'—◡] です。次に、別に **Leben** ['—◡] (人生) というのが規定詞としてこれに附くと、**Leben** の **Le-** は **Anschauung** の **An-** よりも強い筈ですから、結局 **Lebensanschauung** ["'—◡"◡'—◡] となります。それを複数にして、**-ung** よりも弱い **-en** をつけると、アクセントが順々に一段ずつ昇って、**Lebensanschauungen** ["'—◡""◡"—'◡◡] となるわけです。

12. 代名詞主語と定形 **Es regnet** [エス レーグネット] (雨が降る)----**An-, Ab-, Auf-, Ein-** 等の分離前綴は必ず強く発音するという事も重要ですが、其の他にもう一つ重要なのは、代名詞と、動詞の定形が並ぶ時に、「別に代名詞を強調したい時でなければ」、アクセントは普通定形の方にあると云う、此の事です。

英語では、たとえば **Yes, I see!** と云った様な際に、一寸 **I** の音階が **see** よりも上るように聞こえる事があります。これは、第一「音階」が上るの

で、「アクセント」の問題とは直接関係はありませんが、たとえ其の点は仮に問題外として考えても、ドイツ語では決してそんな現象はありません。

er kommt は kommt の方を強く発音します。ich will, sie ist, wir gehen 等、みんな同様に、別に特別な事情がなければ、必ず定形動詞の方を代名詞よりも強く発音します。もし代名詞の方を強く発音すると、たとえば er kommt を「えール・コムト」と発音すると、「彼奴は来る」即ち、「は」に力が這入って、他の人間ではなくて、彼「が」来る、もしくは、彼「は」来るが他の人間はどうか知らない、と云ったような事になります。新聞にこんな一口噺が出ていました。

"Ach, Erich, die Köchin hat gekündigt." 「大変よ、エーリヒ、女コックが暇を呉れって言い出してよ。」

"Aber warum denn ?" 「そりゃ一体どうしてさ。」

"Du bist schuld, sagt sie." 「あなたが不可ないのだから、そう言ってたわよ。」

"Wieso ich ?" 「俺がどうして。」

"Du bist heute am Telefon so grob zu ihr gewesen." 「今日電話であの子に何か失礼な事を仰言っただでしょう。」

" Die Köchin ? O Gott, ich dachte, **d u** warst am Telefon." 「女中だったのか？こいつあ不可ん、俺はまた『お前が』掛かっているのだと思ったんだ。」

エロ味 (das Erotische) たっぷりですね。du にアクセントを入れて読ませるためには、この通り Sperrschrift (第二巻文法 176) にする必要があるのです。

13. 否定前綴 un- にアクセントが有るか無いかで、否定の意が違って来る----これは既に四巻文法の 398 項で述べましたから省略しますが、試みに字引を開いて un- のところにある形容詞を見渡して、そのアクセントが規定詞 un- にあるのと、基礎詞の主なる綴の方にあるのとが如何に入り乱れているかをごらんください。こんな区別がとても覚わった話じゃない、と思われるでしょう。けれども、乱雑なようでも其の間には、おのずから方針というものがあるので、その根本にある最も重要な、意味上の区別を 398 項で述べたわけです。

14. die Heimat [はイマート] 故郷

die Heirat [はイラート] 結婚

der Monat [もーナト] 月 (年月の)----独逸語の字は大抵強く発音する一綴が中心になって、その「うしろ」へ諸種の語尾がついているものです。その語尾は -en, -er, -e, -el, -ung, -chen, -lein, -in 等、たくさんありますが、少し変わった -at, -eis, -eit, -em, -ut 等になると、うっかりすると根本的な規則の適用を忘れるものです。たとえば、一月二月という Monate を「モナート」なぞと発音する間違いはよくあることです。Arbeit (労働) なぞも同様です。次にあげる字には特に注意を要します。

die Gegend	地方	[げーゲント]
die Arbeit	労働	[アルバイト]
die Ameise	蟻	[あーマイゼ]
das Kleinod	宝	[クラインオート]
die Armut	蟻	[アルムート]
der Ahorn	楓	[あーホルン]

外来語は、まあ大抵おしまいにアクセントがある事が多いから(たとえば Alphabet アルファアベート) 反対に下のような、アクセントが独逸語的なものは注意する必要があります。

Almosen, n.	施物	[アルモーゼン]
Alkoven, m.	側房	[アルコーエン]
Alkohol, m.	アルコール	[アルコホル]
Publikum, n.	公衆、江湖	[プーブリクム]

真の外来語のむつかしいものについては、これはまた少し系統的に話す必要がありますから、また他の機会にゆずります。

殊に念を入れて置きたいのは Arbeit, Heirat, Ameise, Monat 等で、たとえば Ameise なぞは、用意の無い人に発音させると、判で压したように -mei にアクセントを入れて「アマイゼ」と云います。また次のように、語尾が附く際には殊に注意しなければなりません。

arbeiten	働く	[アルバイテン]
heiraten	娶る	[はイラーテン]
Monate	数個月	[もーナテ]

同時に例外として Kleinod (宝)を記憶して頂きたい。即ち、これは複数になるとアクセントが一綴後の方へずれて、Kleinodien [クラインおーディエン]となります。同時に -ien という、外来語式な語尾をとって、それを「イ・エン」と二綴に発音します。

15. Unterscheidung [ウンテルシヤイドウング] ('ウウ"ーウ)と

Unterschied [ウンテルシート] ('ウウ'ー)----「区別する」と云う動詞は unterscheiden [ウンテルシヤイデン]で、schei- の方にアクセントがありますから、その事実のみで既にこれが非分離動詞だと云う事がわかるわけです。ところが、此の動詞の語幹 unterscheid- の後に語尾を付けて、名詞を作ることが出来ます。その方法は----

(1) 不定法の儘を、即ち -en の語尾を用いると中性名詞が出来る。

das Unterscheiden [ウンテルシヤイデン]

(2) -ung の語尾をつけると、女性名詞が出来る。

die Unterscheidung, f. [ウンテルシヤイドウング]

(3) -er の語尾をつけて、人を意味する男性を作る。

der Unterscheider [ウンテルシヤイデル] (区別する人)これらはすべて、「語尾をつける」と云う点と、「不定法の儘の語幹を変えずに用いる」と云う点で、共通の性質を持っています。要するに、動詞の不定法を基として出来た派生形態です。これらのものは、そのアクセントは、不定法の場合

合と同じ個所にあります。ところが、派生形態ではなく、(語源的に古へに遡れば勿論派生したものには違いありませんが) 現今では、全然独立した別形態と称すべきものがあります。それは---

(1) **Unterschied** [ウンテルシート], m. 等の如く、語幹そのものが **ei** から **ie** に変わり、同時に何等語尾のつかないものがあります。斯ういう字は殆んど全部男性です。そして同時に、アクセントが規定詞の方にあります。**unterscheiden** の場合とは反対です。つまり此の事実を述べるのが此の項目の主眼です。実際、此の事を知らないと、**unterscheiden** は「ウンテルシヤイデン」なのに、**Unterschied** はどうして [ウンテルシート] と発音しないのだろうか? そして **Unterschied** が「ウンテルシート」なら、**Unterscheidung** はどうして「ウンテルシヤイドウング」ではないのか? と云ったような疑問が生じ勝ちです。

(2) その次には、やはり語幹が変じて、**-e** の語尾を取る女性字があります。**übergeben** (手交する、譲り渡す) は「ユーベルゲーベン」で非分離ですが **Übergabe** (譲渡) は「ゆーベルガーベ」です。

(3) 次は、一寸厄介になって、本当は語源的に理解する必要があるのですが、極く実用的に云うと、動詞の語幹に **-t** の語尾をつけた女性字がかなりあります。たとえば **kommen** に対する **Kunst, f.** [Zukunft, f. 将来、等] **kennen, können** に対する **Kunst, f.** (術) **mögen** に対する **Macht, f.** (勢) など。---- これらも、動詞の不定法とは直接に関係がないものと見なされてしまっていて、アクセントは、たとえ不定法が非分離動詞でも、これらの女性字では前の方、即ち規定詞(前綴)の方へ移ってしまいます。たとえば **unterschreiben** (署名する) は「ウンテルシュライベン」と発音しますが **Unterschrift** (署名) は「ウンテルシュリフト」です。少し厄介ですから、以上三種の例外中主なるものを表にしておきましょう。(茲で初めっから問題になっている厄介な前綴は、**wider-, unter-, über-, um-** の四つです。**wieder-** というのがもう一つあるわけですが、これには偶然そんな厄介がありません。)

アクセントが語幹に	アクセントが前綴に
unterscheiden 区別する	Unterschied, m. 区別
unterrichten 授業する	Unterricht, m. 授業
unterschreiben 署名する	Unterschrift, f. 署名
widerstehen 抵抗する	Widerstand, m. 抵抗
umstehen 取り巻く	Umstand, m. 事情
übergeben 渡す	Übergabe, f. 譲渡
überfallen 襲う	Überfall, m. 奇襲
überblicken 見渡す	Überblick, m. 概観

16. **Komödie** [喜劇] コメーディエ (コメディーに非ず!!!)----外国語から来た字の事はどうしても別に改めて詳しく講義しないと無理ですが、アクセントの話が起って来た序でに、極く必要な事だけ一寸述べておきましょう。

外来語(主としてギリシャ語ラテン語)に -ie の語尾が非常に多い事は諸君も御存じでしょう。

Philosophie 哲学 [フィロゾフイー]
Soziologie 社会学 [ゾツィオロジー]
Photographie 写真 [フォトグラフイー]
Enzyklopädie 百科全書 [エンツュクロペデイー]
Epidemie 流行病 [エピデミー]
Magie 魔法 [マギー]

これらの -ie はすべて希拉の -ia に相当するのですが、アクセントは、凡て -ie にあります。ところが、短い綴のものには、そうでなく、-ie のも一つ前の綴にアクセントがあつて、同時に i と e とを別々に「イエ」とわけて発音するのがあります。ドイツ語の発音で、よく間違ふのは、これらの語です。次に、少し沢山例をあげます。初めの方にあるもの程あたりまえの単語ですから、特にハッキリと口調を馴らして下さい。

Familie 家庭 [ファミーリエ] Linie 線 [リーニエ]
Lilie 百合の花 [リーリエ] Materie 物質 [マてーリエ]
Komödie 喜劇 [コめーディエ] Tragödie 悲壯劇 [トラげーディエ]
Historie 歴史 [ヒスとーリエ] Folie 箔(金銀の) [フおーリエ]
Arterie 動脈 [アルてーリエ] Bestie 野獣 [ベスティエ]
Ferien, pl. 休暇(長期の) [フえーリエン]
Arie 歌劇の「アリア」[あーリエ]
Mumie 木乃伊(みいら) [むーミエ]
Glorie 栄光、後光 [グろーリエ]
Statue 立像 [シュたートウエ] Prämie 配当金、賞与 [プレーミエ]
Akazie アカシヤ [アかーツイエ] Azalie 躑躅(つつじ) [アツあーリエ]
Dahlie ダリヤ [だーリエ] Pinie 傘松 [ピーニエ]
Päonie 芍薬 [ぺおーニエ]
Petersilie おらんだぜり [ペーテルじーリエ]
Grazie (美の女神の名) [グらーツイエ]
Furie (復習、狂乱の女神) [ふーリエ]
Hostie 聖餅 [ほスティエ] Xenie 寸鉄諷詩 [クせーニエ]
Injurie 凌辱 [インゅーリエ] Lappalie 瑣事 [ラッぱーリエ]

Grazie, Furie, Hostie 等の単語は、事実と関係がありますから、単語としては奇異に感ぜられても、案外に重要なものです。

また女の名前 Iphigenie [イフィげーニエ] Amalie [アまーリエ] 等のことは、固有名詞の課で述べたばかりですから、茲では例を省きます。こう云う類型の発音については、-ien [イエン] (「イーン」に非ず) で終る国名、州名に同様の型があるのを参照して覚えるとわかります。

Italien 伊太利 [イたーリエン] Spanien 西班牙 [シュぱーニエン]
Armenien アルメニア [アルめーニエン]
Albanien アルバニア [アルばーニエン]

Sibirien シベリア [ジビーリエン] Asien 亜細亜 [あージエン]
Indien 印度 [いんディエン] Arabien アラビヤ [アラービエン]
Bohemien ボヘミヤ [ボヘーミエン]

17. die Polizei 警察 [ポリツあい]----上項で述べた -ie は、要するに英語の -y の語尾に相当するのですが、それと同じもので、現今ではあまり融通の利かない、即ち類例を造ることのできない語尾に -ei というのがあります。これは必ず -ei の語尾に主なるアクセントがあります。みんな女性です。(Papagei 鸚鵡は男性。)

Polizei, f. 警察 [ポリツあい] Pastei, f. 堡壘 [パスたい]
Klerisei, f. 坊主連 [クレリざイ]
Wüstenei, f. 沙漠、荒地 [ヴューステナイ]
Sakristei, f. 教会の奥室 [ザクリスタイ]
Schalmei, f. 牧笛 [シャルマイ]

国名、州名にも此の語尾があります。つまりは -ien と同じことですが、気持の上では、少し古めかしくて、俗で、同時に一寸侮蔑のニュアンスがこもって来ます。

Lombardei ロンバルジア [ロムバルダイ]
Türkei 土耳古(トルコ) [テュルカイ]
Tschechoslowakai チェコスロバキア [チェヒョスロバカイ]
Mongolei 蒙古 [モンゴライ]
Mandschurei 満洲 [マンチュライ]

支那人は近來とても感情家だから、そのうちに Völkerbund (国際連盟)へ Mongolei を Mongolien に改めろ、なんて持ち出すかも知れません。日本 Japan [やーパン]も、怒りたくなったら、-an というのは、Turkestan, Afghanistan, Belutschistan, さてはアフリカの Sudan に似ているから、Japland か Japanien に改めろ、と云えるわけですね。しかしこれはどうですか。よく似たのに、動詞の語幹に -erei の語尾をつけるのがあります。つまり英語の poetry などという -ry に相当します。既成の字以外に、造語するときには、大抵「盛に.....をやること」「.....三昧」と云ったような、少し悪い意味が付け加わります。

Bildhauerei 彫刻 [ビルトハオエライ]
Malerei 絵画 [マーレライ]
Druckerei 印刷所 [ドルツケライ]
Bäckerei パン店 [ベツケライ]
Sophisterei 詭弁三昧 [ゾフィステライ]
-eln で終る動詞の時には、-elei となります。
Schmeichelei 阿諛 [シュマイヒェライ]
Liebelei 戯れの恋 [リーベライ]

lieben ではなく、lieben (戯れに恋する、軽い気持で恋する、意識的賞翫的に愛をする)、から来たのが Liebelei です。

要するに、-ei の時には、アクセントが -ei 即ち字の一番最後に来ることを覚えてもらいたかったのです。それは、数詞の課 349 で述べた -erlei の語尾についても、例外はあるが、大体において同じ規則が立てられます。

18. **lebendig** (生々した) [レベンディヒ] (れーベンディヒに非ず)---最後に、一字変な例外があります。**leben** (れーベン) という動詞から来ていながら、**lebendig**, **Lebendigkeit** の二字はアクセントが -en に移って、あたかも **le-** という前綴があるかの如き観を呈しています。しかしこれこそ本当の例外です。こんな事は、前に述べた **Keinodien** と同様に、他にほとんど類例がありません。

19. 綴の長短 (長は — 短は ∪)---こんどは、アクセントの問題を去って、綴の長短の問題に移りますが、その前に一寸、これらの問題の根本にある、基礎的な事実について一言しておきたいと思います。

と云うのは他でもありません。アクセントは強弱の問題であって、音の「高低」の問題ではないという事です。

換言すれば、強く発音すると云う事は必ずしも同時にこれを音階的に高くするという事ではない。ただ大抵の場合は両者が一致するというだけの話で、時によっては反対になることがあるのです。否、特にドイツ語では、殊に婦人の発音は、むっしろアクセントのあるところを「低音」で「強く」発音し、アクセントの無いところを「軽く、弱く」そして「高音」で発音すると云う傾向があるのです。男子もやるにはやりますが、あんまり沢山やると甘ったれた口調になって、おかしく感ぜられます。婦人と小児との口調に最も多く現われます。要するに、強弱と高低とは全然別個の問題です。日本語には、原則として強弱の区別は存しません。アクセントと云うことは、厳密にいうと、日本語にはあてはまらないのです。西洋人の日本語が、どうも一たいに強すぎて変にきこえるのは、アクセントを入れるからで、日本人の西洋語が一たいに少し力弱いのは、アクセントというものの本質がぴったりと来ないからです。

西洋語も、梵語、ギリシャ語、ラテン語時代には、どちらかというともむしろ日本語的で、「高低」の区別はあったが、「強弱」の区別は無かったと謂われています。極く大局を判断するための証拠にすぎませんが、たとえば、最も「強弱」を古くから持っていたらしいドイツ語ですらも、**althochdeutsch** (古高ドイツ語) の頃、すなわち 900 年頃までは、現今から見ると、母音の非常に多い、一寸まあ日本語みたいな言葉だったのです。

	althochdeutsch	neuhochdeutsch
	古高ドイツ語	新高ドイツ語 (現在の)
人間	mennisco	Mensch [めンシュ]
乞食した	betalôta	bettelte [ベッテルテ]
世界	Worolt	Welt [ゑゝルト]
そして	enti, anti, unde	und [ウント]
共に	miti	mit [ミット]

子息

sunu

Sohn [ゾーン]

今は、男性三格の定冠詞は **dem** ですが、昔は **demu** 又は **demo** でした。女性の **der** は **deru** だったのです。英語の **if** も **ibu** と云ってあります。斯う云う調子だから、勿論今日のような意味に於けるアクセントはなかったもので、やはり他のアーリアン系民族の印度人やギリシャ人や羅馬人なぞと同じように、単に音の「高低」のみがあったので、アクセントは比較的近代に至って組織化され、意識され、同時に発達し、かくして現今のような、少し神経的、ヒステリカルな欧州現代語が出来たのだ----これが学者たちの想像です。勿論そうでないという人もあるにはありますが、現在日本語のような、アクセントなしの語があれば、そういう点が大問題になってくるのは当然だろうと思います。

「強弱」と「高低」の外に、なお「長短」という区別がはっきりすれば、それで発音の形式的方面は一完結します。

長短の事は、前に — ∪ の記号を用いて一寸説明したことがありますが、さて、長短とは一たいどんな現象でしょう。

日本語では、たとえば神戸 (**Kōbe**)と云えば、長い方の **Kō** は、短かい **be** の二倍だと謂えます。長さが二倍なのです。これはラテン語ギリシャ語等と同様で、その点で西洋の古典語は、現代の西洋人によりは、むしろ日本人の方によくわかります。こう云う意味で、「長は短の二倍」として量るのを、古典語学の方では **Quantität** (量)と云って、丁度日本の三十一文字と同じような詩形論を論ずる時に問題になってきます。

ところが現代の西洋語はちがいます。殊にドイツ語は、力の強弱がはげしい上に、長短の問題も少しわけがちがうのです。

たとえば **die Seele** (魂)というのと、[— ∪] となります。**See-** の綴は、長いと同時に強い。そうすると、**See-** が **-le** の二倍だなぞとは云えない。三倍でもよろしい。四倍でもよろしい。何倍でもよろしい。とにかく、比較にならない程長く延びるのです。

20. 長短に関する一般的法則----ではつまりどんな時に長く発音して、どんな時に短くなるか？

一寸語学上の認識論が間違わないように一言断わって置きます。我々外国人が必要とするドイツ語の法則と、ドイツ人自身が必要とする法則との間には、非常に差があります。我々は主として「書かれた形」を出発点として、さてこれをどう発音するかが問題になるのですが、ドイツ人はそうではない、彼等は、長いか短いかは、字について知っているのです。それをどう書く可きかが彼等の頭を悩ます点です。

従って、我々の立場からして之れを実用的に習わんが為めには、諸種の例外を主としてやって行く必要があります。というよりは、斯う云った方が好いでしょう。**dir** を「ディール」と長く発音する、と斯う我々は云いますが、それは便宜上そう云うので、実はそうではない。「ディール」の発音が先ず先きに存在するので、ドイツ人はそれを **dier** と書かないで **dir** と書くのだ、と斯う思わなくてはなりません。

けれども、今も云ったように、便宜上我々は印刷されてある文字の方を与えられた物として、それから出立して法則を立てて行きましょう。その方が我々には実用的ですから。

まず一般的法則を述べると、前に一度説明したことのある **Anlaut** (頭音) **Auslaut** (尾音) **Inlaut** (中間音) という三つの概念が必要になって来ます。くどいが、念のためにもう一度それを思い出して下さい。たとえば **Mann** という字で云うと、

M = **Anlaut** (頭音) **a** = **Stammvokal** (幹母音) **nn** = **Auslaut** (尾音)

その複数で **Männer** となると、これは二綴になりますから、**nn** は尾音ではなく、**ä** と **e** との、二つの母音の間に挿まった子音、即ち中間子音 (**Inlaut**) と謂います。

M = **Anlaut** **ä** = **St.-vokal** **nn** = **Inlaut** **e** = **Vokal** **r** = **Auslaut**

Stamm (幹)

Endung (語尾)

けれども、**Männer** の **Männ-** だけを問題にする際には、**nn** を **Auslaut** (尾音) と云っても好いわけですから、これから広い意味で **Auslaut** と云う時には、それが **Inlaut** になった時も含まれていると思って下さい。まず、上に図示した、「幹」だけ、即ちアクセントのある、(アクセントがあれば同時に意味の重心があります) 個所のみを就て法則を立てると、

1. 語幹にあっては、**Auslaut** または **Inlaut** が子音一個なる時は、幹母音は長し。

これが英語とは違います。次の例を基礎にして此の法則を確実に銘記しましょう。

Scham シャーム 恥 [シャム] に非ず!

Rad ラート 車輪 [ラッド] に非ず!

Gras グラス 草 [グラス] に非ず!

Glas グラス 硝子 [グラス] に非ず!

Grab グラープ 墓 [グラップ] に非ず!

Schaf シャーフ 羊 [シャフ] に非ず!

Tag ターク 日 [タッグ] に非ず!

ターハ [タハ]

Span シュパーン 木屑 [シュパン] に非ず!

tun トゥーン なす [トゥン] に非ず!

Not ノート 艱難 [ノット] に非ず!

Inlaut が一字の時も同様です。たとえば **schämen** [シエーメン] 恥じる、**Räder** [れーデル] 車輪数個 **Tage** [たーゲ] 数日、等。

2. 二重母音 **au**, **eu**, **ei**, **ie**, **ai**, **ui** は、すべて長く発音します。**au**, **eu**, **ei** 等は、一寸聞くと短かいように思われるが、そうではありません。但し **a** と **u** との二つから成る「あオ」(「あウ」と「あオ」の中間) **au** は、日本語で書いた際の最初の仮名、即ち **au** の **a** のほうが長いのではなく、極端に云うと「あオー」と、「オー」の方が長いのです。「あ」の方は強いが、短かいのです。

3. Auslaut, Inlaut の h は発音しないかわりに、その前の母音を長くする役目を持っています。たとえば ruhen (休む) [るーエン]等。要するに、第一に述べた法則がある以上は殆んど要らないものです。けれども、時とすると、意味の違う字を形の上でも区別する役目を持つことがあります。

ein Mal 一回 [アイン・マール]

ein Mahl 食事 [アイン・マール]

けれども大抵の場合は、h を入れなくても長く読むのですから、無用の長物で、単に念のためです。それと、少し字をのばして形を勿体ぶらせたい心理もあるのでしょう。

die Zahl 数 [ツァール] der Stuhl 椅子 [シュトゥール]

die Sohle 蹠[あしうら] [ぞーレ] der Fehler 欠点 [フエーレル]

それと同じ意味で同じ母音を重ねるのがあります。たとえば See, f. 海、Meer, n. 海、Saal, m. 広間。

4. Auslaut 又は Inlaut が二字以上の子音から成る時は、それが tt, ss, mm 等、同子音の重複たると st, mt, ft, ck 等、異った子音の重複たるとを問わず、幹母音は短く発音する。

Auslaut の場合

Mund 口 [ムント] Hand 手 [ハント]

Dampf 蒸気 [ダムプフ] Herbst 秋 [ヘルプスト]

Kamm 櫛 [カム] Amt 役、役所 [アムト]

Last 重荷 [ラスト]

Inlaut の場合

fallen 落ちる [フアルレン] perlen したたる [ペルレン]

necken なぶる [ねッケン] Sattel 鞍 [ざッテル]

これらはよくわかります。

5. 文法上の語尾が附く際、即ち beten (祈る)から du betest または betst が出来る際----こういう時には betst の Auslaut が -tst だからと云って be を短かく発音するという事はしません。元の形 beten [ベーテン] の be が長い以上は、いつでも長いと思えばよろしい。

21. 例外の場合----前項に述べた長短の規則は、最初にも断っておいた通り、アクセントのある綴、即ち「語幹」にのみ適用される通則であって、語尾の方はまた訳が違います。また語尾と同様に扱う可き軽い言葉も違います。

(1) 語尾は -bar, -sam [英語の -some の語尾に相当す] 等、特に長く発音する数個の例外を除いて、他はすべて短く発音す。(Auslaut が二個の子音たると一個の子音たるとを問わず。)

seh-en, woll-en 等の不定法の語尾、-er, -es, -em, -en, -e, -el 等名詞の語尾、-ig 等形容詞の語尾、その他すべての語尾がこれに属します。但し wunderbar [うンデルバール] 不思議な、langsam [らんグザーム] 等、-bar, -sam の語尾は例外です。-lein, -heit, -keit 等の語尾は、母音の性質上長いにきまっていますから、これらも例外です。

(2) たとえ語幹であっても、小文字で書くもの、即ち代名詞、副詞、冠詞、前置詞、接続詞等は、それ自身がアクセントの入らない、形式的要素ですから、たとえ Auslaut が一つの子音であっても短かく発音します。

man [マン] mit [ミット] es [エス] das [ダス]

in [イン] an [アン] bis [ビス] von [フォン]

けれども、必ずしもそういう場合ばかりでもない。nun は「ヌン」ではなく「ヌーン」です。また Auslaut の無い字は、強く発音する際の na ! [ナ!] 等を例外として、ほとんど長綴ばかりです。

da [ダー] du [ドゥー] ja [ヤー]

je [イエー] so [ゾー] zu [ツー]

Auslaut が -r の際には一たいに幹母音が長くなる傾向がありますが、小文字で書く字もそうで、冠詞の der 等を除くと、ほとんどみんな長綴です。

dir [デール] mir [ミール] für [フュール] vor [フォール]

gar [ガール] zwar [ツヴァール] er [エール] war [ヴァール]

her [ヘール] nur [ヌール]

これで先ず長短に関する一般の規則は終わりました。

22. Keine Regel ohne Ausnahme 例外なき規則はなし----そこで一寸復習をして見ます。ようござんすか? Auslaut が二つの子音ならば幹母音は短、Auslaut が一個の子音ならば幹母音は長、わかりましたね? 試みに質問をして見ます。rot (赤い)これはどう発音しますか? 小川君!

【小川】ロート!

【大先生】よろしい。次は Wort (言葉)----山崎君!

【山崎】ヴォルト!

【大先生】よろしい。次は Mark (馬克)----石原君。

【石原】マルク!

【大先生】よろしい。次は Ton-film (発声映画、トーキー)----岡田君。

【岡田】トンフィルム!

【大先生】違います。Ton という一字だけを取って考えなければなりません。なるほど一寸見ると o の次に nf と二つの子音があるように見えるが、それは Inlaut ではありません。n が Ton の Auslaut, f は film の Anlaut です。

【岡田】では「とーンフィルム」

【大先生】よろしい。次は Trost (慰安)----千葉君!

【千葉】トロスト!

よろしい。次は.....

【岡田】先生、一寸待って下さい。Trost は「トロースト」ではありませんか?

【大先生】いや、st と二つの Auslaut があるから「トロスト」です。短です。

【岡田】僕はすぐ辞書を開けて見たのですが、辞書には Tröst と長い印

がついていますよ。そればかりでなく、Trost に関係のある字は、trösten (慰める)という動詞も「トレストエン」と長くなっていますし、tröstlich (慰安的な)という形容詞も長くなっていますよ。

【大先生】そんな事はない。それは辞書の間違いです。

【小川】先生、ごらんなさい。此の辞書にもそうなっています！

【大先生】.....じゃあ其の辞書も違っています。

【小川】おかしいな.....辞書が二つも揃って違うなんて.....

【大先生】そりゃあ、そういう事もあります。大抵の辞書は何か別な辞書を写したものだから.....(鐘が鳴る).....ではこれで終り。(去る)

【学生】(わいわい騒ぐ) ــــــــ幕。

第二場 教授室

【大先生】(辞書を五六冊机の上にひろげて、フーン！フーン！と云いながら、何だかしきりに感心している。)

【他の大先生】(這入って来る) 減俸問題はどうなったのかね。いよいよ実現されるかね？

【大先生】減俸も減俸だが、君は一たいドイツ語を教え始めて何年になるね。

【他の大先生】我輩はもはや十五六年になるよ。その功績に対しても、減俸なんて以ての外じゃないか。

【大先生】君「慰安」というドイツ語を知ってるかね。

【他の大先生】慰安は「トロスト」さ。トロストはトロストだが、あゝ道ふをやめだよ[?]、われわれはトロストロースだ。

【大先生】我輩は減俸案に賛成だね。

【他の大先生】なななな何だと？減俸案に賛成？それはまたどうした訳で。

【大先生】慰安が「トロスト」だなぞと思っているドイツ語の先生は減俸にした方が好いよ。慰安が「トロスト」だと思っているだけならまだしも、其の上おまけに十五年間もドイツ語を教えていたなんてのに至っては、減俸どころか、馘首したって構やしない。

【他の大先生】「トロスト」が違うかね。

【大先生】違う。

【他の大先生】どう違う。

【大先生】違う。断然違う。

【他の大先生】「トロスト」でなくって何だ。

【大先生】「トロスト」でなくて「トロースト」だ。

【他の大先生】変な事を言い出したぜ。何だか荐[しき]りに辞書をひろげて検べていると思ったら、そんな事を検べていたのかい。

【大先生】僕も実はたった今教室で学生に教わって来たばかりなんだ。

【独逸人の教師】(這入って来る) Guten Tag, meine Herren !

【大先生】Guten Tag !

【他の大先生】 Guten Tag !

【独逸人】 Ja, was ist denn aber los ? Die vielen Wörterbücher.....Die Herren in eifrigem Gespräch..... ! (何か大変な事でも起ったのですか？ 沢山の辞書をひろげて.....何かしきりに言い合っておいでになるようですが.....)

【大先生】一寸伺いますが、Trostの発音は「トロースト」ですか？

【独逸人】 そうです。外国人はよく間違えます。Post (郵便) や Rost (錆)とは違って、長く発音します。

【大先生】 そんな字が沢山ありますか？

【独逸人】 ありますね。

【大先生】 ノートを取りますから、一つ思い出しになれるだけ教えて下さいませんか？

【独逸人】 そうですねえ。必ずしも凡てではないかも知れませんが、思い出してみましょ。-st の語尾のものには特に多いようですね。

23. Tröst 的な例外----

Nüstern, pl. 馬の鼻孔 K^üchlein, n. 雛 Kn^üst, m. パンの皮
W^üst, m. 混沌 Trost, m. 慰安 w^üst, a. 荒涼たる
Este, m. エストランド人 düster, a. 陰惨な Sch^uster, m. 靴屋
J^ost, [人名] h^üsten, v. 咳する Ö^bst, n. 果物
p^üsten, v. 息を吹く P^apst, m. 羅馬法王 pr^üsten, v. 噴き出す
P^robst, m. 僧院の院主 n^ebst, [前置詞] ...と共に
Ostern, pl. イースター祭 b^en^ebst, [前置詞] ...と共に
R^üster, f. 楡の樹 K^roster, n. 修道院 Österreich, n. 奥国

或るものは、よくその関係のある字を考えて見れば分かります。たとえば靴が Schuh だから、靴屋という Schuster も長いと云ったように。

それから、wüst という形容詞が長綴ならば、それと関係のある字は凡て長い。Wüste, f. (沙漠) と云ったように。その次に、-rt, -rb, -rz 等、r を先に立てた Auslaut を持った字には、かなり沢山の例外があります。たとえば、Wert (価値) は「ヴェールト」であって、「ヴェルト」ではありません。

W^ert, m. 価値 Ä^rt, f. 種類 B^art, m. ひげ H^erd, m. かまど
Ä^rzt, m. 医者 z^art, a. 繊細な E^rz, n. 青銅 E^rd^e, f. 土地、地球
Sch^wert, n. 剣 H^arz, m. (山名) G^eb^urt, f. 誕生 w^erden [助動詞]
H^erde, f. 畜群 Sch^arte, f. 刃の欠け目 B^eh^örde, f. 官衛
F^örde, f. フヨールド Schw^arte, f. 古本 Qu^arz, m. 石英
Ä^rsch, m. 臀[しり] Ä^rs, m. 臀 P^ferd, n. 馬 e^rst, a. 第一の
G^eb^arde, f. 身ごなし B^örse, f. 取引所 e^rzen, (er と呼ぶ事)
B^örde, f. 沃地 H^arz, n. 樹脂 G^erhard, (人名)

E^rz (青銅、鋳)なぞは、同じ綴の前綴 erz- (英語で archbishop なぞという arch-, archi- に相当する)と綴の長短で区別されます。

Obst, n. (果物) は、「オプスト」という人もあります。また Frankfurt (フ

ランクフルト)等に現れている、英語の -ford に当る Furt (浅瀬、獵場)は、短くも長くも発音します。

次に並べる字も、大部分は、他の単語から推して知れるものですが、それでも日本人の方はよくまちがえて短かく発音します。

M̄ond, m. 太陰、月 r̄egnen 雨ふる M̄onat, m. (曆の)月
s̄egnen 祝福する M̄ontag, m. 月曜 b̄eḡegnen 出会う J̄agd, f. 狩獵
Ḡegner, m. 相手 M̄agd, f. 下女 L̄ügner, m. 嘘つき
W̄uchs, m. 成長、身の丈 atmen 息する Kr̄ebs, m. かわえび、癌
w̄idrig, a. いやな K̄ebsweib, n. 妾 Ḡem̄alde, n. 絵画 st̄ets 常に
h̄och, a. 高き b̄eredt, a. 雄弁なる h̄öchstens 高々
W̄agner, m. 車造り(の職人) n̄ächst, a. 次の Ādler, m. 鷲
M̄ärchen, n. 童話 V̄ogt, m. 代官(人名の Voigt も同様に発音す)

だから人名の Wagner を、楽聖「ワグネル」というのは誤りで、楽聖ワーグネルと云わなければなりません。人名と云えば、新教を拓いた Luther は、「ルーテル」ではなくて「ルッテル」です。これもよく日本人が間違えます。また哲学者の Schopenhauer を「ショペンハウエル」というのも間違いで、これは「ショーペンハウエル」でなければなりません。

【他の大先生】それ位の事はどうしても好きそうですがねえ。

【独逸人】そんな事があるものですか。たとえば Goethe を「ゲテ」「ゲッテ」なぞと云ったらずいぶんおかしいでしょうからね。

【他の大先生】そう云えばそうですね。

【独逸人】その次に注意しなければならないのは -ch の Auslaut (又は Inlaut)ですね。これは、-ck と同様に、二個の子音から成っていますが、たとえば das Buch 等の様に、幹母音を長くする事もあり、また der Spruch (格言) 等、短母音の事もあります。

【大先生】なるほどねえ。たとえば「言語」はシュプラーヒエですからねえ。(Sprache)

【独逸人】それがまた違います。Spra- まではよろしいが -che の発音は所謂 Achlaut で、「ヒエ」ではなくて「へ」です。つまり「シュプラーへ」です。

【大先生】なるほどね。幹母音が a-, o-, u- の際の尾音 ch は Ichlaut ではなかったな。知っているんだけど、つい間違えっちゃって.....

【独逸人】では -ch の前で長い母音になる字を書いてみましょう。

B̄uch, n. 本 s̄uchen 探す Fl̄uch, m. 呪 n̄ach [前置詞]
T̄uch, n. 巾 br̄ach 休耕の K̄uchen, m. 菓子 Sch̄mach, f. 恥辱
w̄uchern はびこる r̄uchlos, a. 無頼の h̄och, a. 高き
r̄uchbar, a. 噂になった Br̄uch, m. 沼沢地 Spr̄ache, f. 言語
Br̄ache, f. 休耕田 Ḡespr̄äch, n. 談話

suchen が長ならば besuchen, versuchen 等もみんなそうです。

其の次には、-ß の尾音、中間音を持った幹母音ですが、これは、複数その他で語尾が付いた際を考えれば長短がわかります。bloß, a. (裸の)とい

う形容詞は、たとえば ein bloßer Körper (裸体)と書いて、ein blosser Körperとは書きません。では bloß は「ブロッス」ではなくて「ブロース」です。また Fuß (足)は des Fußes (足の)と云って、des Fusses とは書きません。ではこれも「フース」です。ところが Faß, n. (樽)は複数が Fässer です。では発音は「ファス」です。「河」の Fluß も同様です。次にあげるものには特に注意を要します。

長い場合	短い場合(短音は下線で示す)
K <u>l</u> oß, m. 団子 [pl. Kl <u>ö</u> ße]	V <u>o</u> ß 人名 [2. Vossens]
F <u>ü</u> ß, m. 足 [pl. F <u>ü</u> ße]	K <u>ü</u> ß, m. 接吻 [pl. K <u>ü</u> sse]
G <u>r</u> uß, m. 挨拶 [pl. G <u>r</u> üße]	N <u>ü</u> ß, f. 胡桃 [pl. N <u>ü</u> sse]
M <u>a</u> ß, n. 量 [pl. M <u>a</u> ße]	F <u>a</u> ß, n. 樽 [pl. F <u>a</u> ßer]
R <u>u</u> ß, m. 煤 [2. Ru <u>ß</u> es]	F <u>l</u> uß, m. 河 [pl. F <u>l</u> üsse]
F <u>r</u> aß, m. 餌 [pl. F <u>r</u> aße]	B <u>a</u> ß, m. ベース (音) [pl. B <u>a</u> sse]
<u>a</u> ß 食った [wir <u>a</u> ßen]	bl <u>a</u> ß, a. 青ざめた [bl <u>a</u> ss-es 等]
Sch <u>ö</u> ß, m. 膝[ひざ] [pl. Sch <u>ö</u> ße]	Sch <u>ö</u> ß, m. 嫩枝[どんし/わかえだ] [Schosse]
St <u>o</u> ß, m. 突く事 [pl. St <u>ö</u> ße]	R <u>o</u> ß, n. 駒 [pl. R <u>o</u> sse]
Sp <u>a</u> ß, m. 冗談 [pl. Sp <u>a</u> ße]	daß (接続詞)
F <u>l</u> oß, m. n. 筏[いかだ] [pl. F <u>l</u> öße]	G <u>ü</u> ß, m. 鑄[い]る事 [G <u>ü</u> sse]
gr <u>o</u> ß 大な [gr <u>o</u> ßes 等]	naß, a. 湿った [n <u>a</u> ss-es 等]
s <u>ü</u> ß, a. 甘き [s <u>ü</u> ß-es 等]	Sch <u>u</u> ß, m. 一発 [Sch <u>ü</u> sse]

長い方がむしろ例外です。短い方のはもっと沢山あります。要するに a, o, u の幹母音に注意すれば好いので、其の点一寸 -ch の場合と似ています。

【大先生】長と短の両方ともあるのもあるようですね。たとえば Ost, m. Osten, m. (東)は、人によって「おーステン」と云ったり「おステン」と言ったりするじゃありませんか。

【独逸人】そうですねえ。元来長い筈かも知れないが近来どんどんと短く発音して、むしろ其の方が正しくなっていくものがあるのが沢山ありますね。「東の」と云う形容詞 östlich は、もう「えーストリヒ」と云う者があまり居ないようにすし、また nach も nah (近き)も長い筈だが Nachbar (隣人)は、もう発音がルーズになって「なハバール」というのが普通になっています。また hoch (高い)は長いが Hochzeit (婚礼)の hoch は短です。Stadt, f. (市)の複数 Städte も、Stätte (場所)と区別して長く発音すべきですが、「シュてッテ」だって構いません。Urteil, n. (判断)も、Ur- という前綴を考えると「うール」のようだが、実際は「ウルマイル」「ウワマイル」です。もっと変なのは「鯨」(英 whale)という Walfisch, m. です。Wal, m. (鯨)は「ワール」なのに、その次に Fisch を付けて云う時には、これもルーズになって「わールフィッシュ」と云います。「身の丈」という Wuchs, m. も、長いのが本当だが、「ヴックス」とも云います。前に申上げた Geburt, f. (出産)ですね、これも、たとえば、「何処で生れた、何処産の」という gebürtig は「ゲビゅールティヒ」でなくて「ゲビゅルティ

ヒ」です。又、それとは反対に、Faß n. (樽) は短綴だが、前に Ge- のついた Gefäß, n. (容器) は長くなると云った様な場合もあります。Gesäß, n. (お尻) に似ているからですかね。訳はしりませんが。

【大先生】 さあ厄介な事になって来たぞ。これからはうっかり発音もできなくなっちゃった。

【独逸人】 そんなに心配なさる程でもありません。唯今私が申し上げているものが先ず不規則の中の大部分で、他は極く普通使われない特殊な単語になります。

【大先生】 そんなら安心だ。では唯今伺ったのをよくおぼえて置きましょう。その他にまだありませんか？

【独逸人】 唯今申し上げたのは、長短の両方あるもの、または次に語尾その他の語幹が附いたためにルーズになって短かくなって行く傾向ですが、最後の一寸注目を要するのは -sch, -tsch の尾音(又は中間音)です。これは、必ずではありませんが、長い幹母音の字が相当にあります。

Bratsche, f. 中音提琴[ヴィオラ]	hätscheln 甘やかす
Latsch, m. だらしない男	latschen 足を引摺る
Kartätsche, f. 霰弾 (ばら丸)	nutschen (乳を) 吸う
Kladderadatsch ! (崩れ落ちる音) [ガタガタガタン]	
knutschen 抱きしめる	Lätsche, f. 矮[わい]松
watscheln よちよち歩く	Rütsche, f. 襞縁 [ひだふち]
Böschung, f. 斜面	wusch, waschen (洗う)の過去

wusch と同じ様なのでは、動詞の三要形の不規則なものの中には、よく過去形が長いことがあります。dreschen (打禾[だか]する)の過去 drasch (これは drosch と云います) wachsen (生える) に対する wuchs (ヴークス) (これも wuchs ヴックスでもよろしい) sitzen (座る) に対する saß, essen (喰う) に対する aß, fressen (啖[くら]う ---動物に就て云う) に対する fraß, vergessen (忘れる) に対する vergaß.....

【大先生】 それ位なことは私だって知っていますよ。

【独逸人】 そいつは失礼。なるほど、これらはみんな wir saßen (我々が座っていた) sie aßen (彼等が食べた) 等で現れて来るから、まさか wir sassen だとでも思わない以上は間違わない訳ですね。---長い綴と云えば、語尾になる a, o, u ですね。たとえば Propaganda の -da です。これはよく日本人のかたが短く発音するので耳觸りになります。平常の会話ではそうよくはわからないから、まあどうでもよろしいが、少し大きな声ではっきり発音するとなると、やはりおしまいの -da は「ダー」とははっきり言わなくてははいけません。アクセントは入れないで長くです。

それから、たとえば Berlin (伯林)の発音ですが、よく「ベルリン」と「ベ」にアクセントを入れて「リン」を短かく云う日本人がいますが、これは非常にいけません。日本語を話しておいでになる時はまあどうだって好いと云った様なものですが、ドイツ語の中ではやはり正しく「ベルリン」と言わなければ不可ません。伯林ばかりではありません。ドイツの

北部には -in の語尾の町の名が沢山ありますが、それらはみんな長綴でアクセントを置くのです。

Berlin 伯林 [ベルリーン] Stettin シュテッテーン

Kollin コルリーン Wollin ヲ^ゝルリーン

地名と云えば、こういう地名もよく発音法が誤られます。

Dresden ドレスデン Mecklenburg めークレンブルヒ

Pegnitz ペーグニッツ Schwedt シュヱ^ゝート

Schleswig シュレースキ^ゝヒ Estland エーストラント

Teplitz テープリッツ Quedlinburg クエードリンブルク

【大先生】固有名詞で思い出しましたが、劇作家の Wedekind というのがありますね。あれは一たいどう発音するのですか。

【独逸人】Wedekind [ゑ^ゝーデキント]です。これも Wagner や Schopenhauer と同様によく短かく発音され勝ちです。つまり短かく発音するのが日本人の癖なんですね。

【大先生】そうかも知れませんね。いやどうも有難とうム[ござ]いました。その他何か我々がよく間違える発音でお気付きになる事はありませんか。

24. Ichlaut と Achlaut---【独逸人】そうですね、よく考えて見ると大分ありますよ、たとえば貴方がさっき Sprache を「シュプラーヒェ」と仰言いましたね。これはよくある間違いです。a, o, u の次に ch が尾音としてある時には、即ち Bach, doch, Tuch 等の際にはまさか Ichlaut に発音する人はいませんが、これが中間音になって、次に語尾がつくと云うとよく間違えます。たとえば Kuchen (お菓子)は「くーへん」です。「くーヒェン」ではありません。「くーヒェン」と云うと Kuh-chen 即ち「小さな牡牛」と云った様に聞こえます。Kuhchen の際は Kuh, f. (牡牛)が語幹で、その後へ-chen (ヒェン)という縮小名詞の語尾が附いたのだから「くーヒェン」ですが、お菓子という Kuchen は、英語の cake と同じ語源で、元っから一つの字です。Ku- の次に尾音としての -ch が附いていて、その後へ-en の語尾が附いているのです。

machen 為す [まッヘン] [まッヒェン、に非ず]

besuchen 訪問する [べずーヘン][べずーヒェン、に非ず]

lachen 笑う [らッヘン][らッヒェン、に非ず]

Sache 事柄 [ざッへ][ざッヒェ、に非ず]

Woche 週 [を^ゝッへ][を^ゝッヒェ、に非ず]

勿論変音符がついた ä, ö, ü 等が幹母音の際にはちがいます。そうになると、e-, i- 及び子音の後に来る ch と同じ様に Inlaut として発音します。

Gespräch 談話 [ゲシュプラーヒ]

wöchentlich 毎週 [ゑ^ゝッヒェントリヒ]

Bücher, pl. 書物 [ビゅーヒェル]

25. Friedrich [フリードリヒ] と friedlich [フリートリヒ]---その次によくある間違いは、dr, dl, gl, gr, br, bl 等の中間音の、d, g, b を d, g, b に読むべき

ところを t, k, p に読んだり、或いはその反対をやったりすることです。まずドイツ語の発音法をよく知らない人の間違いから申しますと、たとえば **friedlich** (平和な) という形容詞を、それが **Fried-e** (平和) という名詞と **-lich** という語尾とから成っているという事に気が付かないで、(たとえ気が付いたにしても、**Fried** の尾音 **d** を **t** に発音すると云う事実を忘れて)「フリードリヒ」と「ド」を濁って読む間違いがあります。けれどもこんな間違いは、まさか先生方にはありません。

ところが其の事実を知っている人たちは、こんどは凡てをそれで行くものだから、こんどは反対の過ちを犯します。即ち **Friedrich** という人名なぞを、「フリートリヒ」と発音します。これは明かに誤です。なるほど語源的に分解して行けば **Friedrich** だって矢張り **Fried-** と **-rich** との二部分に別れるのですが、今ではもう **-rich** なんてものは、一つの意味を持った語尾とは考えません。それを用いて造語するなんて事もできません。要するに **Friedrich** という人名は、もう分解して考えない一つのまとまった字なんです。だから **-dr-** は **Kuchen** の **-ch** と同様に **Inlaut** (中間音)として扱い、**friedlich** の **-d** のように **Fried-** という語幹の **Auslaut** とは考えません。**friedlich** の際は、荒っぽく云えば **dl** は **Inlaut** ですが、語感ではちゃんと **d** を **Auslaut** に、**l** を次の **-lich** の **Anlaut** (頭音)に考えるのです。故に **-lich** という語尾が附く際には、その前の **g, b, d** は **k, p, t** に発音します。

unbeweglich 不動の [ウンベゑゝークリヒ]

lieblich 可愛い [リープリヒ]

ländlich 田舎風の [れントリヒ]

本当を云うと、たとえば **beweglich** なぞと、**g** 等の前の **e** が長い時には、**beweg-** と **g** にさしかかる時には濁音で、**-glic** と続く時に **k** になるのです。けれどもこれはまあ余程ドイツ人の発音心理が呑み込めないという簡単には合点できないかも知れません。一たいに我々ドイツ人の **g, b, d** は、どっちかと云うと **k, p, t** に近いので、たとえば仏人のような、日本人のような、はっきりした **g, b, d** の発音のできるドイツ人は十人のうち五六名しかいないかも知れません。たとえば **Krieg** (戦争)が一寸 **Grieg** のようにきこえる、反対に **ach Gott!** (やれやれマア!)が **Ach Kott!** にきこえる。**Goethe** がこんな話をしています。(エッケルマンの日記 1824年5月5日) 或る時 **Goethe** が **Jena** へ行ったら、見も知らぬ青年が会いに来て、初めの中は一たい何の用で来たのだから訳がわからなかったが、さて帰る間際になって、「実は一寸おねがいがあるのですが.....」と切り出して、**Goethe** に代って説教をさせて呉れと云い出した。**Goethe** は別に坊さんではないから、説教なぞするわけがないがと、よく考えて見ると、なるほど! **Jena** には **Koethe** (ケーテ)という僧がいた。青年はつまり **Koethe** と **Goethe** とを間違えたのです。字を見ないで言葉だけで話しているとよくこんな事があります。勿論地方にもよりますが。

-lich の際は前に述べた通りですが、**-rich, -drig, -grig, brig** 等は、すべて **g, b, d** を濁らなければなりません。第一 **-ig** というのは形容詞の語尾なんで、

別に -rig という語尾があるわけではありませんから、その前の d, b, g は、語幹の Auslaut ではありません。Friedrich の dr と同様 Inlaut です。

niedrig 低き [にードリヒ] klebrigねばついた [クレーブリヒ]

hungrig 腹の減った [ふングリヒ]もっとも hungrig の gr の g は、鼻に掛かった g です。それは ng と、n の次に来る時は凡てそうなんです。

26. Nibelungen 等の -ng. ----この鼻音の -ng は、ちゃんと日本語にあるにも拘らず、よく日本人の方は間違えます。(第一巻 37 の(4)を見よ)----

27. ewiglich (えーヴィクリヒ) -ig の語尾について一つ注意しなければならない事があります。これは必ずしも厳重に守られてはいませんが、次にまた -lich の語尾が附く時には、-ig は Auslaut として「イヒ」と云うべき筈ですが、これを「イック」と読みます。少し g の掛かった k だと思えば宜しい。ewig (えーキヒ)「永久の」wonnig (を`ンニヒ)「幸福な」等は、それ自身は勿論必ず Ichlaut でなければいけません(これを -ik のように発音するのは、たとえばフランス人のドイツ語とか、猶太[ユダヤ]人のドイツ語とかに限ります) その次に -lich が附くと、Ichlaut の重複を避けて g を濁音がかかった k に発音します。この規則はたとえば mannigfaltig (種々の)等にも適用することがあります。

28. ew'ge (えーキ`エ)----それからもう一つ。-ig の語尾に、格語尾が附いて ewige, einzigen, weniger 等になると、アクセントの無い i は省略して 'g になることがあります。殊に詩文などでは。そうすると g の発音が、オランダ語や低地ドイツの g に近くなる。即ち先ず j と同じことになるのです。だから ew'ge は「えーキ`エ」となります。普通の ewige の場合でも、もう、ge の発音は、所によっては「えーキ`ヒエ」または「えーキ`イエー」またはそれらの中間の発音になるのです。つまり Gott という際の g よりは軟かくなるのです。----たとえば伯林地方などでは、g をすべて j のように発音します。よく伯林人の悪口に言われることですが

Gut gebratene Gans mit goldenen Gabeln gegessen.

ユート・イエブラーテネ・ヤンス・ミット・よルデネン・やー
ベルン・イエイエッセン

(よく焙った鷺鳥を金のフォークで食った)

【大先生】「べえべえ言葉が止んだなら、金でも三百つん出すべえ」ってえ奴ですな。ついでに一寸伺って置きますが、たとえば der Vater と云う際の -er の語尾ですな。こいつは元来「エル」でなければならぬ筈だが、あなた方ドイツ人の中で、これを「フアーテル」と正しく仰言る人は百人に一人もいないようですが、これは一たいどうした訳でしょう。

29. Vater (フアータ)----【独逸人】さあ、こいつは最も实际的な、しかも一寸厄介な問題ですな。なるほど必ずしも「フアーテル」と日本人の方がお考えになるように -er をひびかせはしません。しかし決して r を省

いているつもりはありませんがね。

【大先生】だって殆んど「フぁーター」ときこえるじゃありませんか。

【独逸人】そうですかねえ。なるほどそう云えばそうですねえ。しかしまさか Soda (ぞーダー)「ソーダ」という時の a じゃありませんね。---つまり我々の r の発音法は、あなた方のは少しちがうのです。あなた方は捲き舌で、舌を震動させて rrr! とおやりになる。われわれのは喉の声帯に近い辺を震わせるのです。つまり Zungen-r (舌のエル)ではなくて Kehlkopf-r (喉頭のエル)なんです。仏蘭西人の大部分もそれです。此の喉頭の r を発音するためには、必然的に口が開きます。だから「ア」に近い音が出るのです。また此の喉の r は、よっぽど力を入れないと震動を起しません。大抵の場合は、かすれて Achlaut の出来損いのような音になってしまいます。結局 a のような事になってしまうのですね。

【大先生】では Vater (フぁータ) Mutter (むッタ)と云って構わないのですね。

【独逸人】そうですとも、それがあんまり露骨に「あー」とならないで、一寸 a と o との間位で軽くひびきされすれば、むしろ普通の会話では全部「むッタ」「フぁータ」「ブるーダ」でなければいけない位です。その方が実際の発音に近くなります。もっともドイツ人の中にだって、ずいぶん頑迷な人があって、必ず「エル」と云わなければ承知しない人もありますが、それはあんまり実用的ではありません。英語の方では -er を「ア」に近くやってそれで英人の発音に近いとされているのですから、ドイツ語だってそれで好い筈です。

ただドイツ人には er が「エル」だという意識が英人よりも強く働いています。だから、たとえば、綴り方をやったり、一字をはっきり言ったりする時には V-a-t-e-r (フぁーテル)とはっきり r を発音します。

【大先生】けれども詳しく云うと、-er を「ア」に近くひびかせる場合と、e をはっきり発音して其の次に軽く「ア」を加えて「エア」と云う際とがありますね。

【独逸人】そうです。つまり er (彼)とか wer (誰)とか werden ()とか云う場合の er は、語幹の -er などで、唯今までお話したのは語尾の -er です。

【大先生】では語尾の -er を「エア」と云っては絶対に間違いですか？

【独逸人】絶対に間違いですね。反対に、Werther なぞの語幹まで「ヴァータ」と云うのも絶対にいけません。

【大先生】けれども、あなたが今 Werther をはっきりと正式に発音なすった時には、私にはどうも「ゑゝーアテア」ときこえましたよ。ねえ君、君はどうだった。

【他の大先生】(居眠っていて答えない。)

【大先生】(笑って)いやだよ此の男は。

【独逸人】はっはっは！それは多分例の喉頭の r があなた方にはそうきこえるのでしょう。ではもう一度発音して見ましょう。Werrrtherrrr! どうです。

【大先生】なるほどねえ。こんどは r が顫[ふる]えたな。するとつまり

斯う云う訳ですね、r の発音が第一喉で行われたのだから、どうしても口を a, 又は o に近く開けなくてはならない。ところが喉の r は必ずしも完全顫動はしない。そこで、大抵の場合は a, o に近い音だけが残ってしまうというわけですね。

【独逸人】そうですそうです。それが語尾の際にはもっとルーズになって、ついでに前の e まで一緒になって「ア」ときこえるのです。けれども Werther の Wer- など、力を入れる綴は決して「ワ`ー」ではなく、はっきりと「ゑ`ール」です。それが「ゑ`ーア」ときこえるのは、これは半分はドイツ人の責任で(r が顫えない場合)半分は聞く人の耳の方の責任です。

【大先生】では ver-, er- 等の前綴はどうです。

【独逸人】それも語尾と同様で、或いは全然「ファ」「アー」のように「聞こえる」かも知れませんね。少くとも「フェア」「エア」には聞こえるでしょう。

【大先生】er- を「アー」なんて云う事はない事はわかりますが、ver- などは全然「ファ」ときこえる事がありますね。では我々も「ファ」と言って構わないでしょうね。

【独逸人】さあ.....それはその人の技倆一つですね。

【大先生】と申しますと？

【独逸人】ver- が「ファ」のようになるのは、われわれでもよほど早口で饒舌っている時の事ですから、極くゆっくりとしか饒舌れない人が ver- を「ファ」と云ったら、ちょっと変になりますね。

【大先生】なるほどね。そう云えば日本語にでもそう云う事がありますよ。たとえば東京人は「僕のうちへ」を「僕ンチ」なんて云いますが、それはよっぽど江戸っ児弁がすらすらと話せる人にして初めて云える省略で、四五日前に田舎から来た人などが此の「ボクンチ」をはっきりと「ボクンチ」とやったら、ずいぶん変でしょうからね。

【独逸人】なるほど、何処でも似た事はあるものですね。

【大先生】その外、母音子音の各々について心得る可き事が沢山ありますか？

【独逸人】ありますね。そういう細かい話になったら、とても一時間や二時間では話しきれません。実地について練習して頂くよりしかたがありませんね。

【大先生】どうも有難うございました。まあこれだけ伺っておけば大いに役に立ちます。後はまた日をかえて教えて頂きましょう。(鐘が鳴る) おや、もう鐘だ。

【独逸人】(起つ) So. Und nun an die Arbeit !

【大先生】(他の大先生をゆり起こして) おいおい、鐘が鳴ったよ。

【他の大先生】(眼をさまして) 君たちの話は面白くない話だねえ。さて、また教室へ行って学生と一緒に面白く遊んで来よう、と。(出掛けようとする。)

【大先生】(留めて) おい君、一寸待った。外でもないがね、一寸君の智

慧を借りたいんだ。

【他の大先生】 Sehr gern !

【大先生】 よせよ、ドイツ人がいなくなると急にドイツ語を饒舌り出す奴だ。---実はねえ、Trost の一件だがね、Trost は短い綴だと思って話していると、学生の奴、辞書を見ていやがって、先生「トロースト」じゃありませんかと云って抗議を申し込みやがったもんだから、僕は断然そうじゃないと云って頑張ってしまったんだ。今これからまた同じ教室へ出掛けなくっちゃあならんのだが、.....何とかならないものかね。

【他の大先生】 何とかならないものかって、つまり君はどう云う風になりたいんだ。

【大先生】 どう云う風について.....つまり結局は我輩に理があったと云った様な事にさ。

【他の大先生】 それは無理だね。ドイツ語の辞書を片っ端から焼いてしまうか、それとも学生の辞書を全部取り上げてしまうか、-----いや、それだけじゃ駄目だ、第一ドイツ人全部殺してしまわなくっちゃ駄目だ。

【大先生】 まったくねえ。そうするとまた第二次の世界大戦 (Weltkrieg) が起るね。しかしまあ、我輩としては出来ることなら、血を見ずに済ませたいね。其の他に何か方法はないかね。

【他の大先生】 じゃあもう簡単に此の一時間をお休みにしちまうんだ。

【大先生】 そうすると問題はまた此の次の時間に延びるきりだ。

【他の大先生】 そのうちには彼等だって忘れてしまうよ。

【大先生】 忘れるもんか。忘れてならない事はどんどん忘れるが、忘れて好い様な事は決して忘れないから。

【他の大先生】 じゃあ、まあ教室へ行って、風向きを見て、どうなりと適宜にやり給え。

【大先生】 多少妥協して、我輩の方も正しかったが、辞書の方もまんざら間違っただけではなかった.....と云った様な辺で折り合いは附かないものかな。

【他の大先生】 つまり Trost の綴は、長いと云えば長いとも云えるし、短いと云えば短いとも云える、結局観方の問題だ、と云った様にね。

【大先生】 それもあんまりだが、.....まあ好い、何とか適当にごまかして来よう。さよなら。

第 三 場 教 室

【大先生】 此の時間は読本を読みます。読本を開けて。

【生徒の一人】 先生、発音の話の続きはしないのですか？

【大先生】 それはまた此の次にします。では五十三頁。田川君、読んで。

【小川】 先生、Trost の問題はどうなりました。

【大先生】 Trost の問題？そんな事はまあどうでも好い。田川君、はやく読んで。

【田川】 Die Bürger warfen, an aller Rettung verzweifelnd, den Feuerbrand in ihre

Häuser und töteten sich und die Ihrigen mit eigener Hand, um den verhaßten Gegnern die Rache und Beute zu entziehen : das war wenigstens ihr letzter Trost.....

先生、これは「トロスト」ですか「トロースト」ですか。

【大先生】ん.....辞書では普通「トロースト」となっているようですがね。

【小川】実際はどうなんですか？

【大先生】実際は.....まあ大抵の場合「トロースト」と言っはいますがね。

【小川】言わない事もあるのですか？

【大先生】いや、そんな事は滅多にありません。

【小川】でも、たまにはあるのですか？

【大先生】たまには.....あるでしょう。

【小川】どう云う時にですか？

【大先生】.....どう云う時につて.....つまり間違えた時さ、わっはっはっは！

【皆】(笑う)

-----幕。